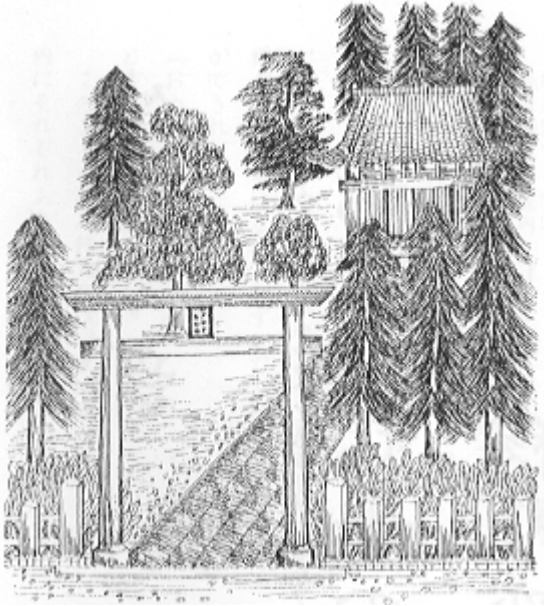


かすがじんじやくでん
春日神社口伝より (鳥井町)

この口伝は、平安時代に建立された桜鬼社の由来や、古くからあった御板部神社が春日神社に変わったいきさつが語られています。



(一) 桜鬼社

ちれき
治暦四年(一〇六八年)藤原隆家卿が都の天皇
つか
のお使いで、信濃国(長野県)の諏訪神社へ行か
れることになりました。

ほくりくどう
北陸道を通つて御板部郷(鳥井町)まで来られ
ると、突然白髪のおじいさんが現れました。隆家
卿が

「あなたは、何者ですか。」

と、問えば、

「わたしは、仲哀天皇の時から御板部郷を守護し

てきた大山御板部神社の御板部岡神である。」

と申されました。驚いた隆家卿は、

「では、どのような御用で今出現されたのですか」

と伺うと、

「昔、この辺りに桜鬼という怪しい鬼が住んでい
て、大和朝廷に背いてきまりを守らず、村人を
苦しめたので、暴れないように千引きの石(神
話に出てくる石)でぶさいでおいたところ、今

は鎮ま^{しず}って朝家^{ちやうけ}（大和朝廷）を守りたいと願^{ねが}っているので社^{やしろ}を建て^たててお祭り^{まつり}しなさい。」

と、お告^つげになり、その石^{いし}を教^{おし}えられました。

隆家^{たかさか}卿^{けい}は、早速^{さつそく}一棟^{ひとむね}の御堂^{おどう}を經^たてて桜鬼^{おうき}大明神^{だいみょうじん}を祭り^{まつ}り、大山御板部^{おおくやまのいたたべ}神社^{じんじゃ}の末社^{まつしや}にするよう、村人^{むらぢ}達^{たち}に申^{まを}しつけられました。

その後^{のち}、神奇^{しんぎ}瑞^{ずい}あらたかに次々^{つぎつぎ}と良^よいことが続^{つづ}いたので村人^{むらぢ}は熱心^{ねつしん}に信仰^{しんじよう}しました。鳥井^{とりい}町^{まち}には今^{いま}も桜鬼^{おうき}田^{でん}という地名^{ぢめい}が残^{のこ}っています。

(二) 春日神社

藤原隆家^{ふじわらのたかさか}卿^{けい}は、大山御板部^{おおくやまのいたたべ}神社^{じんじゃ}に参詣^{さんけい}され、桜鬼^{おうき}社^{でん}を建て^たてて桜鬼^{おうき}大明神^{だいみょうじん}を祭り^{まつ}られた時に、神社^{じんじゃ}の社名^{しゃな}が変^かえられました。

大山御板部^{おおくやまのいたたべ}神社^{じんじゃ}の祭神^{さいしん}、武甕槌^{たけすかづち}命^{のみこと}、經津主^{ふつぬし}命^{のみこと}に加^くえて、藤原^{ふじわら}氏^{うぢ}一門^{いっもん}の先祖^{せんぞ}である天兒^{あめのこ}屋根^{やね}命^{のみこと}、比咩^{ひめ}大神^{おほがみ}を一^{いっ}緒^{しょ}にお祭り^{まつり}して、春日^{かすが}神社^{じんじゃ}と名^な前^{まへ}を變^かえ、鳥井^{とりい}村^{むら}、下司^{しもぢ}村^{むら}、当田^{あた}村^{むら}、熊田^{くま}村^{むら}、有定^{いうぢぢ}村^{むら}、志摩^{しま}村^{むら}、岸村^{かきむら}の七^{なな}か村^{むら}を御戸^{みと}代^{しろひ}（第二集 流^{なが}され

た志摩^{しま}村^{むら}・岸村^{かきむら}参照^{さんしやう}）に当^あてられました。

その後^{のち}、国司^{こくし}、領主^{りやうしゆ}も神社^{じんじゃ}を崇敬^{すうけい}し、村人^{むらぢ}達^{たち}も神様^{かみさま}の徳^{とく}を感謝^{かんしゃ}したので、近郷^{きんきやう}十五^{じふご}か村^{むら}の総社^{そうしや}として近世^{きんせい}まで盛^{さか}んなお祭り^{まつり}がありました。

広^{ひろ}い参道^{さんどう}に朱塗^{しゆぬ}りの大鳥居^{たうい}があつたので大鳥居^{たうい}村^{むら}と言^いわれました。

この伝説^{でんせつ}から大和朝廷^{やまとのちやうてい}に従^{したが}つた人々^{ひとびと}の様子^{ようす}や、当時の権力者^{けんりよくしや}、藤原^{ふじわら}氏^{うぢ}の勢力^{せいりよく}の伸^のばし方^{かた}がうかがえます。隆家^{たかさか}卿^{けい}は北陸道^{へいりくどう}から越後路^{えちごじ}（新潟^{にいがた}県^{けん}）を經^へて信濃^{しなの}国^{くに}の諏訪^{すわ}神社^{じんじゃ}へ行^いりかれましたが、その道^{どう}中^{ちゆう}至^しる所^{ところ}で地方^{ちほう}の神社^{じんじゃ}を春日^か神社^{じんじゃ}に変^かえました。

